

# 日本産魚類全種目録

これまでに記録された日本産魚類全種の現在の標準和名と学名

本村浩之

〒890-0065 鹿児島市郡元1-21-30 鹿児島大学総合研究博物館

E-mail: motomura@kaum.kagoshima-u.ac.jp

魚類における目、科、属、種、亜種などの分類学的単位に与えられる固有かつ学術的な日本語の名称を標準和名という（日本魚類学会標準和名検討委員会，2005）。日本産の魚類に標準和名が体系的に適用されたのは，Jordan et al. (1913)が最初であるが，日本魚類学会標準和名検討委員会（2005）によって，中坊（2000）を標準和名の起点とすると規定された。その後，中坊（2000）の増補改訂版である中坊（2013）が出版され，現在，魚類の標準和名は概ね中坊（2013）に基づき，学術論文などの専門書，図鑑や教科書などの教育普及書，博物館，水族館，動物園などの教育研究施設における展示，水産物（水産庁，2007），および新聞やテレビなどのメディアなどで広く使用されている。標準和名は固有名詞として扱われ，通常カタカナで表記，英文書中では頭文字を大文字にしてヘボン式ローマ字で表記されることが多い。ただし，日本魚類学会では標準和名を固有名詞か普通名詞かの判断を下していない（日本魚類学会標準和名検討委員会，2004）。なお，高次分類群ではフサカサゴ科Scorpaenidaeやフサカサゴ属Scorpaenaなどと学名と併記して用いられることがあるが，Scorpaenidae科やScorpaena属などとは表記しない。

一方，魚類の学名は国際動物命名規約に準拠して扱われる。種階級群の新しい学名は（現在は）標本に基づいて提唱され，新種が記載されるたびに学名は増えるが，異名関係や同名関係の判明によって減ることもある。種間類縁関係の再検討によって，属の枠組みも目まぐるしく変わるため，学名は世界共通の名称ではあるものの，不安定な名称であるともいえる。また，種階級群の学名は基本的にその名前を担う標本（担名標本）に基づくため，学名＝標本であり，どちらかという種に対応する標準和名とは概念が異なる。本目録においても標準和名と学名を併記しているが，両者が強くリンクしているわけではない。例えば，将来研

究が進みグアムカサゴScorpaenodes guamensisがScorpaenodes japonicusという学名に変更された場合でもグアムカサゴはニホンカサゴにはならず，グアムカサゴのままである。

研究が進むほど変更される不安定な学名に対し，標準和名には安定性が求められており，差別用語を含む名称の改訂を除き，標準和名の変更はほとんど行われない。例外として，日本国内で1種とされていたものが，2種に分かれると判明した場合に，混乱をさけるために2種に新しい標準和名をつける場合などがある。その場合はもともとの標準和名が種としては抹消されることになるが，属名などで残る場合もある（ササノハベラ→アカササノハベラ+ホシササノハベラ，「ササノハベラ」はササノハベラ属としてのみ残る；メダカ→キタノメダカ+ミナミメダカ，「メダカ」はメダカ科やメダカ属として残る）。差別用語であることを根拠に初めて標準和名が改称されたのはセムシカサゴ（ニライカサゴに改称）である（本村ほか，2004）。その後，日本魚類学会として1綱2目・亜目5科・亜科11属32種の差別用語を含む標準和名の改称が行われた（日本魚類学会，2007）。

魚類の分類学的研究の成果は日々公表・更新されており，日本魚類学会のホームページには中坊（2013）以降に変更があった日本産魚類の学名と日本産として追加された種のリストがそれぞれ「シノニム・学名の変更」と「日本産魚類の追加種リスト」として公表されている。この中には中坊（2013）で掲載漏れしていた種も含まれる。しかし，ホームページで公開されているこれらのリストは，個別の論文や図鑑類の出版年月日順の更新公開であるため，日本産全種や分類群別に最新の標準和名や学名を概観することができない。魚類分類学研究者であれば，個別の学名の変更や標準和名との対応を把握することができるが，分類学以外の魚類学研究者やその他の分類群を主とする生物学・

生態学研究者、あるいは一般の方々が最新の日本産魚類の名称を調べるのは現状では困難である。

そこで、本書では中坊（2013）も含めた日本産魚類全4,554種（2020年5月13日時点）の現在の標準和名と学名の一覧を分類体系順（第1部）、標準和名の五十音順（第2部）、および科和名の五十音順（第3部）に提示することによって、万人が容易に最新の日本産魚類の名称を把握することができるようにすることを目的とした。

## 材料と方法

中坊（2013）以降に追加・変更された科名、学名、属や種の標準和名はすべて灰色塗りつぶしセルで示した。中坊（2013）に書かれた学名のスペルミスをただした場合も灰色塗りつぶしセルで示した。分布の更新などが示された報告や論文もできるだけリストの備考に加筆した。定期的に確認、リストに反映させた雑誌は以下のとおりである：Aqua, Biogeography, Copeia, Cybium, Fauna Ryukyuan, Ichthyological Research, Nature of Kagoshima, Raffles Bulletin of Zoology, Species Diversity, ZooKeys, Zootaxa, 沖縄生物学会誌, 鹿児島大学総合研究博物館研究報告, 鹿児島大学水産学部紀要, 神奈川県立生命の星・地球博物館研究報告・調査研究報告・神奈川県立自然誌資料, 魚類学雑誌, 生物地理学会会報, タクサ, 東海自然誌, 南紀生物。その他の雑誌については個別に情報が入り次第、反映させた。なお、スペース削減のため、et al.や雑誌略語のピリオドは省略した。

科番号はNelson (2006)を基準に鹿児島大学総合研究博物館の魚類コレクションの管理番号にしたがった。スペース削減のため、種の記載者が2名の場合のandは&とし、記載者と原記載出版年の間のカンマは省略した。種の標準和名のローマ字表記はヘボン式を採用し、フリーソフトでカタカナからヘボン式ローマ字に一括変換した後、個別に修正を加えた。例えば、ナンヨウアゴナシはNonyoagonashiと変換されるが、このままでは「ナニョ（ウ）アゴナシ」となるので、Nan-yaogonashiと修正した。また、nの後に母音が来る場合など、例えばニテンエソはNitenesoと変換されるが、「ニテネソ」となるため、Niten-esoと修正した。

## 利用上の注意点

1種につき複数の学名の候補がある場合（特に帰属の問題を抱えた種）、それらは備考にコメントを付けた上で、筆者の考えで適用すべき学名や標準和名を選択

しているため、本書の内容がすべての魚類分類学研究者に受け入れられているわけではないことに留意する必要がある。特に属の扱いなど、研究者によって意見が異なり、どちらかを選択することが困難な種には2つの学名を併記した。

本書では中坊（2013）以降に出版された各種の分布記録も文献とともに付記した。中坊（2013）と本書を確認することで、各種の日本国内における分布記録を把握することが可能である。ただし、地方誌などをすべて網羅できているわけではないので、注意が必要。本目録を作成した当初は鹿児島大学総合研究博物館の研究室内での使用を目的としていたため、鹿児島県内や南日本の魚類については分布情報として豊富な文献をリストしているが、北日本の魚類に関する2015年以前に出版された文献は貧弱である（2016年以降は概ねリストされている）。また、淡水魚の扱いについても今後の修正が必要かもしれない。

なお、日本産魚類全種目録は毎日更新されており、最新版（エクセル）は鹿児島大学総合研究博物館ホームページ上で公開されている。本書のような冊子版は数年毎に最新版を出版予定である。エクセル版は地方博物館の魚類コレクションデータベースの辞書ファイルや魚類相リストの学名チェックなどに活用して頂ければと思う。例えば、新しいエクセルに魚類の標準和名をリストし、日本産魚類全種目録を辞書ファイルとしてVLOOKUP関数を利用すると、リストした標準和名に対応する学名を隣のセルに表示させることができる。数百種の標準和名リストでも一瞬で学名つきのリストに変換可能である。利用は自由であるが、成果物を公表する際は日本産魚類全種目録を利用した旨を明記して頂きたい。

## 謝辞

リストの更新作業に伴い、瀬能 宏氏、遠藤広光氏、甲斐嘉晃氏、松沼瑞樹氏、日比野友亮氏、篠原現人氏をはじめとする多くの方々に文献や適切な助言を頂いた。これらの方々に謹んで感謝の意を表す。本書の作成は鹿児島大学総合研究博物館の「鹿児島県産魚類の多様性調査プロジェクト」の一環として行われ、JSPS科研費（20H03311）、JSPS研究拠点形成事業（Bアジア・アフリカ学術基盤形成型）、および文部科学省機能強化費（世界自然遺産候補地・奄美群島におけるグローバル教育研究拠点形成）の援助を受けた。

## 引用文献

- Jordan, D. S., S. Tanaka and J. O. Snyder. 1913. A catalogue of the fishes of Japan. Journal of the College of Science, Imperial University, Tokyo, 33: 1-497.
- 本村浩之・吉野哲夫・高村直人. 2004. 日本産フサカサゴ科オニカサゴ属魚類 (Scorpaenidae: *Scorpaenopsis*) の分類学的検討. 魚類学雑誌, 51: 89-115.
- 中坊徹次 (編). 2000. 日本産魚類検索 全種の同定, 第二版. 1-2巻. 東海大学出版会, 東京. lvi + 1748 pp.
- 中坊徹次 (編). 2013. 日本産魚類検索 全種の同定, 第三版. 1-3巻. 東海大学出版会, 秦野. xlix + 2428 pp.
- Nelson, J. S. 2006. Fishes of the world. Fourth edition. John Wiley & Sons, Inc., Hoboken. xix + 601 pp.
- 日本魚類学. 2007. 差別的語を含む標準和名の改名とお願い. <http://www.fish-isj.jp/info/j070201.html>
- 日本魚類学会標準和名検討委員会. 2004. 魚類の標準和名のローマ字表記について (答申). <http://www.fish-isj.jp/iin/standname/opinion/040514.html>
- 日本魚類学会標準和名検討委員会. 2005. 魚類の標準和名の定義等について (答申). 魚類学雑誌, 52: 179. <http://www.fish-isj.jp/iin/standname/opinion/050902.html>
- 水産庁. 2007. 魚介類の名称のガイドラインについて. [https://www.maff.go.jp/j/heyu/pdf/guide\\_line.pdf](https://www.maff.go.jp/j/heyu/pdf/guide_line.pdf)